

学校概要

創立 42 周年	学校長 加藤 裕之	副校長 岩松 玲子	学期 3 学期制	児童・生徒数 300 人
学級数 一般級: 8 個別支援級: 3		主な関係校: 中沢小学校		

学校教育目標

自主・創造・共生  
 ○自ら発想し、つくりだす力を育てます(知)  
 ○自分を認め、自他ともに大切にすることを育てます(徳)  
 ○たくましい心と健やかな体を育てます(体)  
 ○社会に貢献する意識を高めます(公)  
 ○新たな一歩を踏み出す意欲を高めます(開)

学校の特徴

- 学区は閑静な住宅街であり、地域、家庭ともにとっても落ち着いた環境にある。
- 1小1中であり、また小学校との距離も短く、小中連携を図りやすい環境にある。
- 学習に意欲を持ってまじめに取り組む生徒が多い。
- 学習内容の習得に課題のある生徒も一定割合いる。
- 生徒の規範意識は高く、生徒指導上の問題は少ない。
- 自己肯定感を十分に持てていない生徒や失敗を恐れて挑戦することに躊躇する生徒が少なくない。

学校経営中期取組目標

- 学校教育目標の実現に向けて、以下のような学校の姿を目標にして取組を進めていきます。
- ・生徒が事件・事故に巻き込まれたり、怪我をしたりすることなく、またいじめなどが無い安全で安心して過ごせる環境を確保します。
- ・教職員が生徒を第一に考えて寄り添い、生徒の成長のために一体となって教育に当たる学校を構築します。
- ・すべての生徒が主役となって活躍し、自ら進んで困難な課題に挑戦し解決することで達成感を味わい、成長する機会を確保します。
- ・1小1中という恵まれた環境を活かして、小中連携を進め、一貫して切れ目のない教育活動を行います。
- ・地域との連携を進め、生徒の成長につながるのと同時に、地域の課題解決にも貢献できる活動を行います。

小中一貫教育の取組

旭中学校	ブロック	旭中学校・中沢小学校
9年間で育てる子ども像	○自分を見つめ、自身の将来(生き方)を考えることができる子ども。 ○一人の人間としての自立を目指す子ども。	
自校の具体的取組	・小学校併設型中学校として、「小中一貫教育推進特別委員会」を発足し、児童・生徒の実態、地域・保護者のニーズを踏まえ、小中一貫カリキュラムの検討を進める。小中学校合同の「学校運営協議会」の設立の準備をする。 ・教職員による合同研修会、授業参観・授業研究会を設定し、子ども像を共有し、児童生徒指導や特別支援教育の共有を図る。・児童生徒交流会や小6児童の授業見学・部活動体験などの児童生徒活動を実施をする。	

重点取組分野	取組目標	具体的取組
確かな学力	基礎的な資質や能力を習得させるとともに、課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習を充実させ、授業改善に努める。	①タブレット端末やデジタル機器の活用法を周知していき、それらを活用する。②校内授業研究会を年2回行い、お互いの授業を見合うことで、「個に応じた分かる授業」、「一人ひとりの学習の困難さに応じた授業」を目指す。③1学期中に、生徒による授業評価を実施し、集計結果をもとにしながら授業改善を行う。
豊かな心	命の大切さや自分を認め、他者への思いやりを感じる学習の展開を教育活動全般で行う。	①道徳科の授業を充実させるため、校内研修を積極的に行い、年間指導計画などの周知をはかる。②具体的な道徳科の授業では、学校の教育活動全体との関連を意識し、学校行事等のさまざまな体験で高められた自己有用感や他者理解の心情を道徳の時間で深めていくことを重視する。
健やかな体	自らの心や体の健康・安全に関心をもち、主体的に行動できる資質や能力を育てる。また、生徒自身が目標を定め、実践力の育成と体力の向上を図る。	①生徒の実態を外部講師と共有した上で、薬物乱用防止教育、性・いのちの教育や食育を行う。②学校保健委員会を柱とし、一人ひとりが学期ごとに自分の健康づくりを振り返る機会を作り、保護者・地域への情報発信も積極的に行う。③「体力づくり」「縄跳び」を継続して行い、体力テストを年2回行うなど体力の向上を実感できるように取り組む。
地域連携	保護者・地域との連携を深め、生徒とともに育てる体制を構築する。また、地域行事への自発的な参加を生徒に促し、社会に貢献する意識を高める。	①地域行事の年間予定を生徒・保護者に配布し、地域行事に自発的な参加を促す。②学校便り・ホームページ・掲示板等で、学校の様子を知らせる。その中で、地域行事での生徒の活動の様子を紹介し、地域との協働を推進する。③地域行事ごとに参加する職員の手配を決め、全職員が保護者・地域との連携を深める。
キャリア教育	自らをみつめ、将来、社会の一員となる自分像を描くことができる生徒の育成に努める。	①教科・領域・学校行事などあらゆる教育活動で9年間の学びを通じたつながりある実践(児童生徒交流会を含め)を「自分づくり教育」として、小学校と連携しながら行う。②キャリア教育として発達段階に応じた体験学習(職業インタビュー、職場体験等)を行う。卒業後の進路に向けた活動を通して自分の生き方を見つめられるようにする。
特別支援教育	個々の特性に応じた指導ができるよう情報交換を定期的に行う。関係機関との連携を密に行いながら個々の生徒を支援する。	①特別支援教育委員会で、支援を要する生徒への具体的な支援方法を考え、職員間での情報共有を図る。②カウンセラーと連携し、特別支援コーディネーターを中心とした組織的な支援を行う。③ユニバーサルデザインの指導方法の研究・実践を進め、一人ひとりの学習の困難さに応じた指導を工夫する。
特別活動	様々な集団活動を通して、自他ともに大切にすることを養いながら集団への所属感や連帯感を深め、よりよい学校生活を築こうとする意識を育成する。	①生徒の活動にタイミングを合わせて話し合いの時間を設定することで、生徒自身による自主的な話し合い活動を促す。②体育祭、合唱コンクールだけでなく、文化発表会でも実行委員による生徒の振り返りの集計や検討を行い、生徒視点での行事の捉えを生徒会広報誌等で発信することで、所属感や連帯感を深める。
人材育成・組織運営	27年度に改編された組織の活性化を図るため、各部署が自主的に企画・立案し、係間の連携とともに、運営改善に努めることにより人材育成も図る。	①メンターチームの研修を年4回行い、人材育成を図る。また、中幹・学年主任会を行いミドルリーダーの人材育成を図る。②外部講師を積極的に活用するとともに、キャリアステージに応じた校外の研修に参加して習得した知識を校内で共有することで学校経営に生かす。③学校評価の振り返りから、教育課題解決にむけ組織的な対応を図る。
いじめへの対応	生徒一人ひとりに、居場所と役割があり、受け入れられ、自己有用感をもって学校生活が送れるようにする。	①だれもが安心して参加でき、自尊心を高める授業を研究、実践していく。②親和的な学級集団、学年集団、生徒集団づくりを進め、生徒が自己有用感をもち、自尊心を高められる特別活動、行事を工夫する。